

「軍記物語」ができるまで

青山学院大学文学部附置
人文科学研究所主催講演会

2022年3月12日

佐伯 真一



はじめに

1

2019年4月に文学部附置人文科学研究所が設立されて、
2年間所長を務め、
また2021年度は副所長を務めました。

今年3月末日の定年を前にして、研究所の企画として
このような講演の機会を与えていただいたことに、
まず御礼申し上げます。

本日は、私が研究してきた「軍記物語」について、
その概念がどのように形成されたかという問題を通じて
軍記物語の性格を考えると同時に、
私たちが文学作品というものをどう理解しているのか
考えてみたいと思います。
このような順序でお話しします。

1. はじめに

2. 「軍記物語」と「合戦状」

3. 「軍記」という言葉と作品

4. 近世の「軍記」と武士

5. 「軍記物語」の誕生

6. 「軍記物語」は武士の文学か

7. おわりに

「軍記物語」と 「合戦状」

2

2. 「軍記物語」と「合戦状」

5

「軍記物語」は、平安時代の『将門記』に始まり、
鎌倉時代の『平家物語』や南北朝時代の『太平記』を頂点として、
江戸時代成立の戦国軍記に至る諸作品であるとするのが、
現在の通説的な理解です。

しかし、たとえば『平家物語』や『太平記』の作者は
「軍記物語」を作ろうと思って作ったわけではありません。

「軍記物語」という概念は、
近代に文学史用語として作られたものであって、
現在のような形で確立したのは20世紀後半のことです。



寛文十一年版『太平記』表紙：国文学研究資料館蔵



延慶本『平家物語』：大東急記念文庫蔵

2. 「軍記物語」と「合戦状」

6

「軍記物語」と類似の概念を表す言葉が
前近代に全くなかったわけではありません。

たとえば、鎌倉時代には、

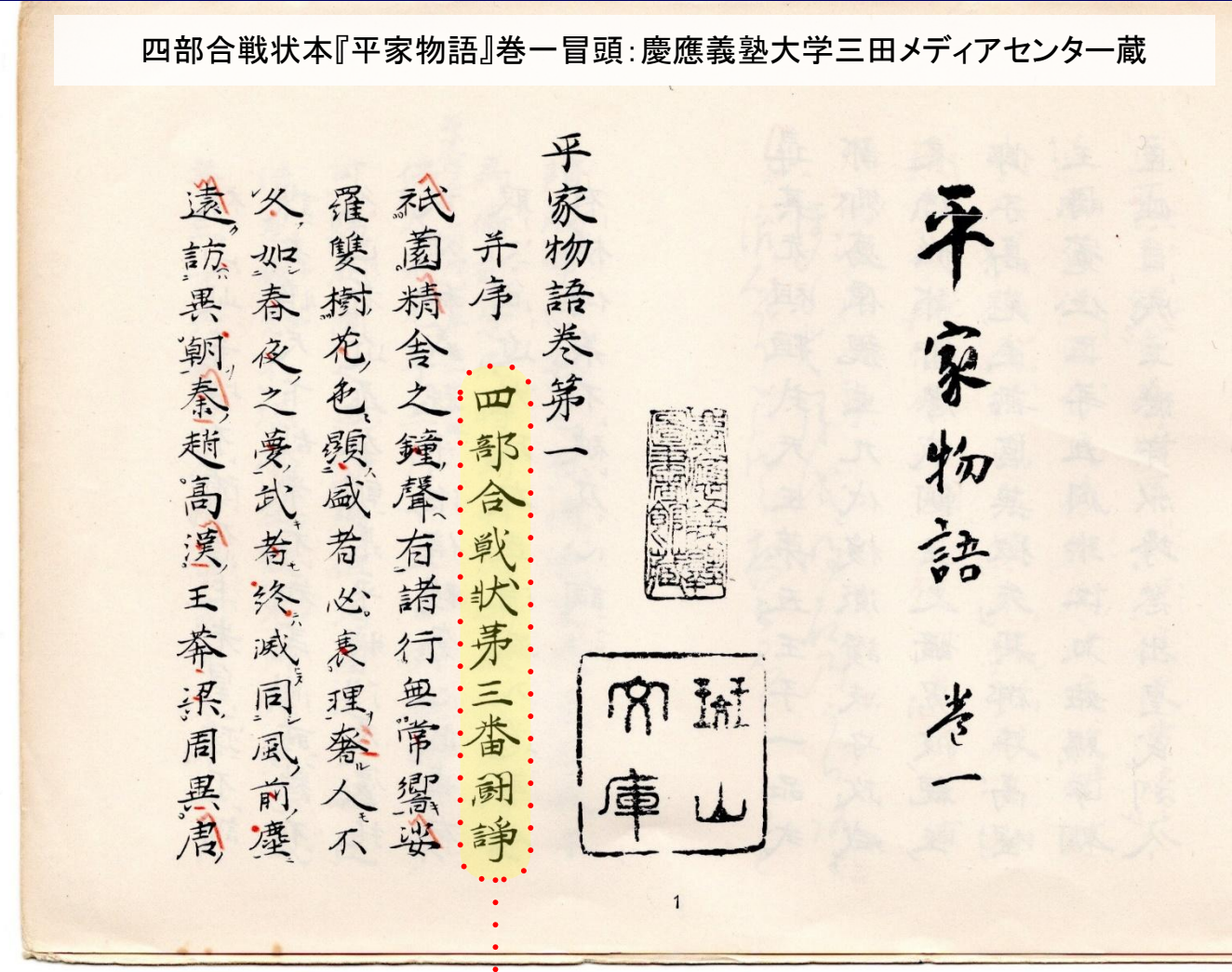
『保元物語』『平治物語』

『平家物語』『承久記』を一括して

「四部合戦状」と呼ぶことがありました。

「四部合戦状本『平家物語』」の題名や、
琵琶法師関係の資料などに残っています。

四部合戦状本『平家物語』巻一冒頭：慶應義塾大学三田メディアセンター蔵



「四部合戦状第三番闘諍」の題があります。
『保元物語』『平治物語』に次いで、
「四部合戦状」の三番目という意味です。

2. 「軍記物語」と「合戦状」

7

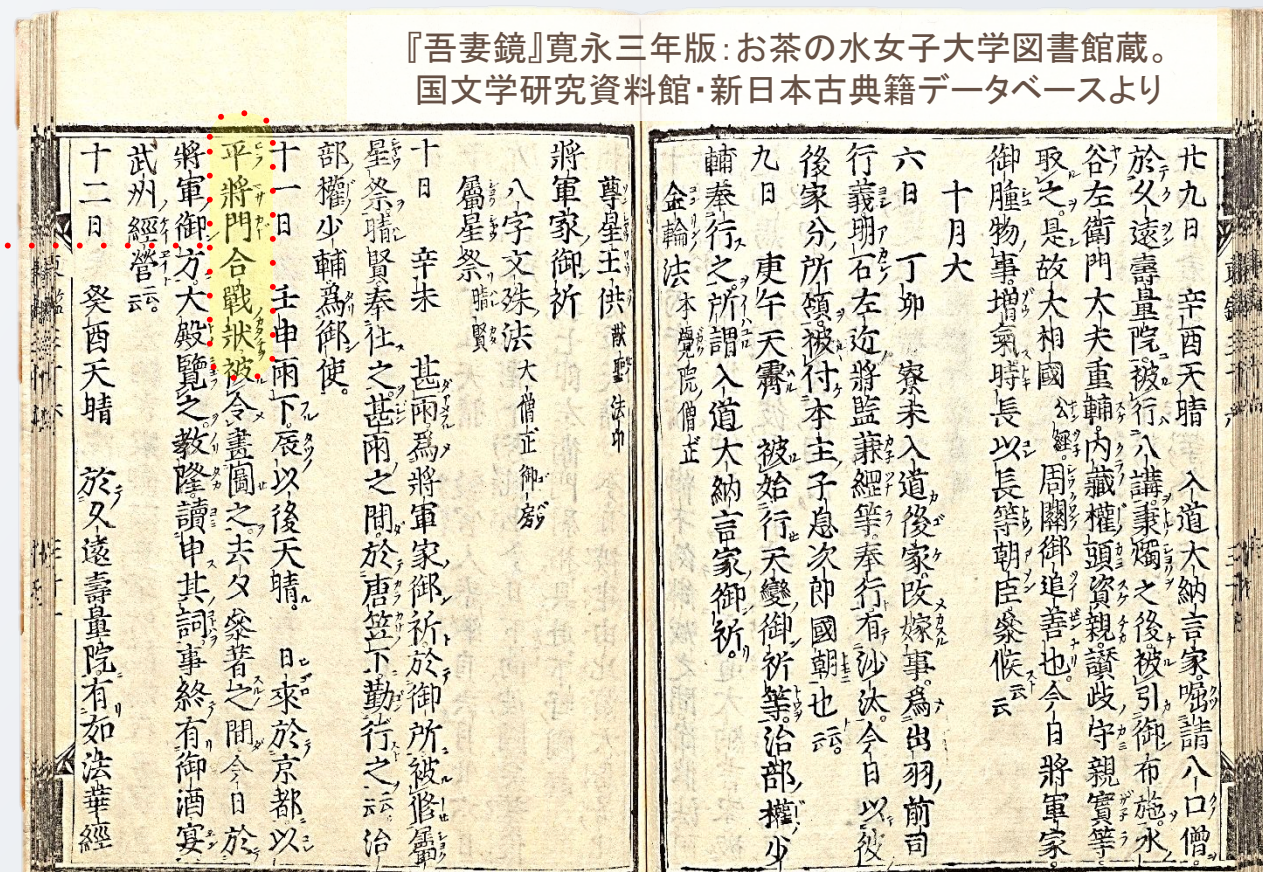
ここで「合戦状」という言葉が使われていますが、『将門記』についても、平安後期から鎌倉時代に「将門合戦章」「将門合戦状」といった呼び方がなされていたことがわかっています。（『扶桑略記』『言泉集』『宝物集』『吾妻鏡』など）

従って、

『将門記』や『平家物語』などが
合戦を描くことを特色とした作品として
捉えられていたことは確かです。

寛元三年(1245)十月十一日条に
「平将門合戦状」を絵巻化していた
記事があります。

『吾妻鏡』寛永三年版：お茶の水女子大学図書館蔵。
国文学研究資料館・新日本古典籍データベースより



2. 「軍記物語」と「合戦状」

しかし、同時に見ておかねばならないのは、
これらの作品が**合戦を武士の立場でとらえているわけではない**ことです。
たとえば『将門記』は、主人公の将門について、このように総括しています。

爰将門頗積_レ功課於官都_一、流_レ忠信於末代_一。

而一生一業猛濫為_レ宗、毎年毎月合戦為_レ事。故不_レ屑_二学業之輩_一、此只翫_二武芸之類_一。

是以対_レ楯問_レ親、好_レ悪被_レ過。然間、邪悪之積、覃_二於一身_一、

不善之謗、聞_二於八邦_一、終殞_二版泉之地_一、永遺_二謀叛之名_一矣。

爰に将門は、頗る功課を官都に積み、忠信を末代に流^{つた}ふ。

而るに一生の一業は猛濫を宗と為し、毎年毎月に合戦を事と為す。故学業の輩を屑^{もののか}とせず、
此只武芸の類を翫ぶ。是を以て楯に対しては親を問ひ、悪を好みては過ちを被る。

然る間、邪悪の積り、一身に覃^{およ}び、不善の謗り、八邦に聞えて、終に版泉の地に殞^{ほろ}びて、
永く謀叛の名を遺せり。



2. 「軍記物語」と「合戦状」

爰將門頗積功課於官都、流忠信於末代。

而一生一業猛濫為宗、毎年毎月合戦為事。故不厝学業之輩、此只翫武芸之類。

是以対楯問親、好惡被過。然間、邪惡之積、覃於一身、

不善之謗、聞於八邦、終殞版泉之地、永遺謀叛之名矣。

傍線部は、「將門は、たけだけしい悪行ばかりを行い、常に合戦ばかりに明け暮れていた。

そのため、学問を修めた者達を重用せず、ただ武芸の類をもてあそんでいた」

と批判したものです。

將門が合戦に明け暮れ、「武芸」に夢中になっていたことが批判されているわけですが、

後の時代の武士であれば、

「武士が武芸に熱中して何が悪い」というところでしょう。

『將門記』は、武士の立場で書かれているとはいえないわけです。



2. 「軍記物語」と「合戦状」

10

『将門記』に比べると『平家物語』は、**武芸に専念する武士を肯定的に描いています。**
その代表的な存在が**源義経**であり、屋島合戦などで、義経が英雄的に描かれていることは著名です。

しかし、『平家物語』は一方で、
元暦元年(1184)の大嘗会行幸に供奉した義経を、次のように酷評しています。

木曾などには似ず、^{もつてのほ}以外に^{みや}京馴れてはありしかども、
平家のなかの選^り層よりも猶おとれり。

〔 義経は義仲に比べればましで、都に慣れてはいるけれど、
平家の中の残りカスよりももっと劣っていた。 〕



2. 「軍記物語」と「合戦状」

儀礼の際の優美さにおいては、義経は、平家とは比べものにならないほど劣っていたというのです。

しかも、そこで義経と比較されているのは、安徳天皇の大嘗会の際に義経と同様の供奉を務めた**平宗盛**です。

宗盛は、『平家物語』では武士として最低と描かれている人物です。

その宗盛も、こういう儀礼の場では義経よりは優美だったというのです。



2. 「軍記物語」と「合戦状」

12

『将門記』では、合戦を描くといっても被害者側の視点が目立つという指摘もあり、それは『平家物語』にもある程度は言えることです。

もちろん、『平家物語』が武士の視点で合戦を描くこともありますが、そうした視点で作品全体が統一されているわけではありません。



ところが、後にこれらの作品を「軍記」とか「軍記物語」という名前と呼ぶようになった時には、そうした側面がそぎ落とされてしまう。

それはこれからお話ししますが、私がここで問題にしたいのはそういうことです。

「軍記」という

言葉と作品

3

さて、『将門記』や『平家物語』などの具体的な作品を一旦離れて、
「軍記」「軍記物語」という言葉を問題にしたいと思います。

そもそも、「軍記」とはどういう言葉なのか？

これはおそらく和製漢語で、日本でもさほど古い言葉ではありません。
現在確認されている範囲では、「軍記」という用例の初出は、
康永二年(1343)の「吉川経明軍忠状」(吉川家文書)の、次のような用例です。

為_レ備_二軍記_一、恐々言上如_レ件

〔 軍記に備へんがために、恐々言上くだんのごとし。 〕

笹川祥生「『北条九代記』の「今」」
(『軍記物語の窓・一』和泉書院・1997年12月。『戦国軍記の研究』和泉書院・1999年11月再録)の指摘による。

為_レ備_二軍記_一、
恐々言上如_レ件

この直前には、この文書の筆者が
主君に忠節を尽くして戦ったことが書かれています。
それを記録して後代に伝えたいという意味です。

同様の文書では、「**軍記**」の代わりに
「後証」「後訴」「後鏡」「亀鏡」といった言葉が用いられています。
合戦に関する確かな証拠、記録といった意味と考えられます。

14世紀中頃になって、初めてこういう言葉が確認できるので、
『平家物語』が成立した13世紀前半には、
まだ「軍記」という言葉は存在しなかったと見られるわけです。
従って『平家物語』が「軍記」として作られたわけではない、というのは自明のことです。
その後の『太平記』なども含めて、現在「軍記物語」と呼ばれる主要な作品は、
本来「軍記」と呼ばれていたわけではありません。

3. 「軍記」という言葉と作品

16



近世には『〇〇軍記』といった類の題名を持つ作品が大量に作られますが、「軍記」という言葉が軍記物語に類する作品の題名に用いられるようになるのは、おそらく16世紀から17世紀のことです。

『関ヶ原軍記』表紙：国文学研究資料館蔵。国文学研究資料館・新日本古典籍データベースより

しかし、それ以前の15世紀に、『義貞軍記』と『倭国軍記』という、二つの作品があります。これらは「軍記物語」に類する作品ではなく、教訓や兵法を内容とした書物です。

現在では全く知られていませんが、『義貞軍記』は、近年、一部の研究者の間ではようやく認知されるようになってきました。

今井正之助 「『義貞軍記』考—『無極鈔』の成立に関わって—」

(愛知教育大学『日本文化論叢』5号、1997年3月。『『太平記秘伝理尽鈔』研究』汲古書院・2012年2月再録)

佐伯真一 「『義貞軍記』と武士の価値観」(『アジア遊学173 日中韓の武将伝』勉誠出版2014年3月)

「翻刻・紹介『倭国軍記』」(『青山語文』44号、2014年3月)

いずれも『軍記物語と合戦の心性』(文学通信・2021年4月)再録。

3. 「軍記」という言葉と作品

17

『義貞軍記』の書名は新田義貞の著作という形をとったものですが、実際に義貞が書いたものではないでしょう。おそらく、武士の著作としての権威付けを狙って仮託したものと見られ、作者は不明です。

この作品が重要なのは、
武士の生き方を「道」として提起した最初の書物だということです。
その冒頭には、次のようにあります。

学習院大学蔵『義貞軍記』冒頭



昔より今にいたるまで、文武二つに分かれて、其の徳天地のごとし。
一つも阙けては、国を治する事あるべからず。されば、公家には文をもつて先とす。
詩歌管絃の芸、これなり。**当道**には武をもつて基とす。弓馬合戦の道、是なり。

昔から今まで、文と武は二つに分かれて、それぞれの徳は天と地のように、
どちらが欠けても国を治めることのできないものである。そこで、公家は文を重視する。
詩歌管絃の芸がそれである。一方、我々の道は武を基としている。弓馬合戦の道がそれである。



昔より今にいたるまで、文武二つに分かれて、其の徳天地のごとし。
一つも闕けては、国を治する事あるべからず。
されば、公家には文をもつて先とす。詩歌管絃の芸、これなり。
当道には武をもつて基とす。弓馬合戦の道、是なり。

『義貞軍記』は、まず「文」と「武」の二項対立を示し、

「文＝詩歌管絃」は公家のものだが、「**当道**」つまり「我々の道」は「武＝弓馬合戦」だと宣言します。

「**当道**」は、何らかの専門的な「道」に生きる人々が、自分の専門的な技能や生き方、心得を言った言葉です。

たとえば、歌人にとっては和歌が、琵琶法師にとっては平家琵琶が「当道」でした。

歌人にも琵琶法師にも、それぞれ独特の修練の方法があり、またその世界の掟があったわけですが、

本書は、自分たち武士にとっては「武＝弓馬合戦」が「道」であり、

そこには独自の専門的な心得や生き方があるのだと宣言しているわけです。

『平家物語』や『太平記』が、武士の視点に立つ記事を多く導入しつつも、
貴族や僧によってまとめられたと見られるのに対して、
これは、**武士の、武士による、武士のための書物**だったわけです。



『義貞軍記』はその「道」を説くために、
武士に必要な現実的知識を列挙したり、
過去の武士たちの逸話から良い例や悪い例を挙げて、
「武士はこのようにあるべきだ」
「このようにしてはいけない」といった教訓を説いています。
つまり、**武士の立場で**
武士の生き方や実用的な知識を説いた教訓書です。

「軍記」と題する書物は、当初、そういうものでした。

3. 「軍記」という言葉と作品

20

その教訓は、多くの場合、
『平家物語』をはじめとする
鎌倉時代の軍記物語を題材としています。
たとえば、「**山河之戦事**」。

或人の家の日記に、山を落とすべき事には義経、一谷の体、
河を渡すべき事には足利又太郎忠綱、
宇治川を渡しける事を書きおかれたりと云へり。
両条尤も之を守るべし。

合戦で山を駆け下る時には**源義経の坂落**
(『平家物語』巻九・一ノ谷合戦)、
河を渡る時には**足利又太郎忠綱の馬筏**
(『平家物語』巻四・橋合戦)を
手本とせよというわけです。

坂落。断崖を騎馬で降りる義経勢『源平盛衰記絵巻』

3. 「軍記」という言葉と作品

21

また、「正直も時に依て儀^ぎにしたがふべき事」では、
越中前司盛俊をだまし討ちにした
猪俣則綱(『平家物語』巻九)を「希代の高名」と賞賛します。

一谷の戦の時、猪俣小平六則綱が、
越中前司を討つたりしは、約束をちがへたり。
正直に非ずといへども、是をば希代の高名とす。

功名をあげるためには敵をだまし討ちにすることも厭うな、
戦場では正直よりも勝利が第一だと教えるわけです。

盛俊・則綱の話については、

佐伯真一『戦場の精神史—武士道という幻影—』
(日本放送出版協会・2004年5月)参照



盛俊の首を高く掲げる則綱：林原美術館蔵『平家物語』

3. 「軍記」という言葉と作品

このように、『義貞軍記』は武士の規範を示す題材を『平家物語』などの軍記物語に求めています。

本書にとって軍記物語は、武士の規範を示す教材集だったわけです。

このような受容によって、『平家物語』などは、

「軍記」即ち合戦に関する知識・教訓の書として読まれるようになったわけです。

むしろ貴族的な価値観を基本に置いている『平家物語』にとって、

それは作品本来の性格とは大きく異なる理解でしたが、

この15世紀頃から次第にこうした理解がなされてゆきます。

『平家物語』は「軍記」として生まれたのではなく、

「軍記」になったのだ、と言えるでしょう。



「軍記」と武士

4

4. 「軍記」と武士

24

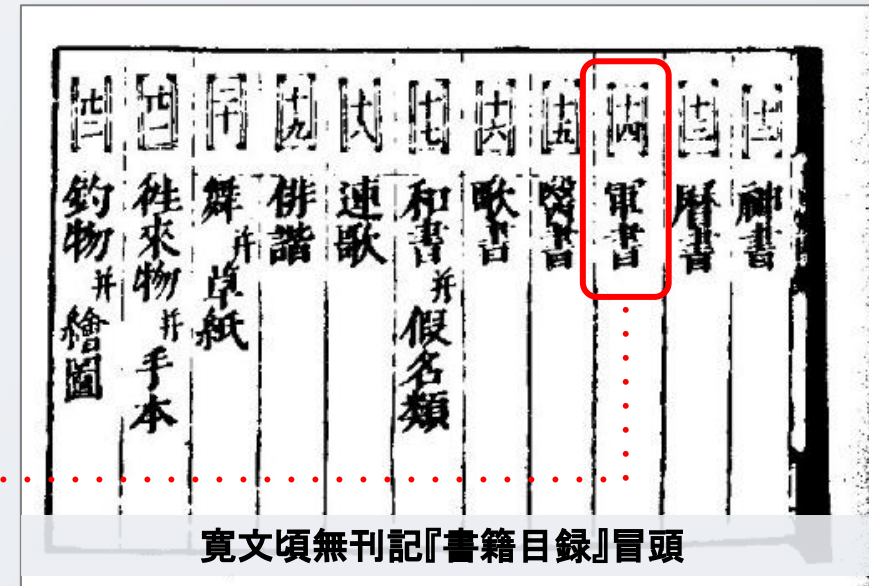
さて、

近世(江戸時代)になると、「軍記」という言葉が一般化し、
軍記物語の類に『〇〇軍記』という書名も
多くつけられるようになります。

同時に、「軍記」と同義語に近い「**軍書**」という言葉が、
版本の分類用語として用いられるようになります。

日本の近世は出版の時代であり、
多くの書物が刊行されるわけですが、
刊行物を分類する用語の中に「軍書」があります。

寛文(1661～1673)頃の無刊記『和漢書籍目録』では、
収載書目を22種に分類するうちの14番目が「**軍書**」です。



寛文頃無刊記『書籍目録』冒頭

4. 「軍記」と武士

25

この「**軍書**」は、軍事を学ぶのに役立つ本という分類で、中国古典の兵法書である**七書**から始まり、日本の兵法書や『平家物語』、『盛衰記』（源平盛衰記）、『太平記』などが並んでいます。

先ほどの『義貞軍記』も見えています。

軍事、合戦について学ぶための教材として

『平家物語』などを扱うというのは、

現存する文献では『義貞軍記』に

初めて見られることですが、

そうした姿勢が近世には一般化したとも言えるでしょう。

ただし、「**軍書**」の中心は『平家物語』よりも『太平記』です。

三畧	同鈔	同直解	軍林寶鑑	殘儀兵的	大明軍記	素書	孫具滴語	軍法極秘傳	軍法待用集	武士功者書
----	----	-----	------	------	------	----	------	-------	-------	-------

七書	同無點	同道春點	同小本	同鈔	同直解	同講義	同評判
----	-----	------	-----	----	-----	-----	-----

同假名	平家物語	同假名	同繪入	同評判	曾我物語	同繪入	義經記	同繪入	承久記	應仁記
-----	------	-----	-----	-----	------	-----	-----	-----	-----	-----

軍法兵法記	諸家評定	師鑑抄	同兵利書	軍政集	東鑑	江源武鑑	盛衰記	同假名	義貞軍記	保元平治
-------	------	-----	------	-----	----	------	-----	-----	------	------

寛文頃無刊記『書籍目録』
「軍書」項

明德記	北條五代記	見聞軍書	甲乱記	太平記	同鈔	同假名	同大字	同評判	同新板	同大全
-----	-------	------	-----	-----	----	-----	-----	-----	-----	-----

軍事について学ぶ「軍書」という書物が重要な位置づけをされたことは、近世社会の一つの特色でしょう。
近世は、武士的な価値観が、階層を問わず、日本社会全体に浸透した時代でもあります。



「仮名手本忠臣蔵」討ち入りの場：広重画

「中世は戦乱が多い武士の時代、
近世は平和で庶民文化が花開いた時代」
という捉え方はよく見られます。
もちろんそういう面もあるのですが、
文学や文化の歴史はそういう見方ではとらえきれません。

日本の近世は、
武士的価値観が社会全体に浸透した時代でもあります。
たとえば「仮名手本忠臣蔵」は、敵討ちを絶対正義とした
武士独特の価値観に基づく物語ですが、
現代に至るまで、絶大な人気を博しています。

『平家物語』の受容に関して言えば、たとえば**熊谷直実と敦盛の物語**の問題が挙げられます。

『平家物語』では、熊谷直実が、

息子と同年齢の美少年敦盛を討って、武士の生き方がほとほといやになったと語られます。

この時代の武士たちは所領のために戦っているので、

所領を継がせる息子を非常に愛しているというのが、物語の前提です。



この物語は、世阿弥によって能「敦盛」に仕立てられますが、これは、敦盛の笛に焦点を当て、風雅な物語となっています。

世阿弥の能は、このように『平家物語』の風雅な側面を大きく取り上げるものです。

一方、浄瑠璃・歌舞伎の「一谷嫩軍記」では、敦盛は実は院の御落胤なので、殺してはならないという義経の命令が下ったという設定になります。

そこで、熊谷は忠義のために息子の首を斬って、敦盛の首と偽って差し出すという物語となっています。



能「敦盛」：観世三郎太
令和3年2月7日、観世会定期能



歌舞伎「一谷嫩軍記」
上演ポスター：松本幸四郎
2016年、歌舞伎座

佐伯真一「熊谷・敦盛説話の近世的変容—父子関係を中心に—」
(青木敦編『世界史のなかの近世』慶應義塾大学出版会2017年3月)

『平家物語』は多様に展開してゆくので、一つの方向だけで語るわけにはいかないのですが、近世には武士の視点で軍記物語を理解することが多くなってゆくのは確かです。

『太平記』の場合には、

『太平記秘伝理尽鈔』などのいわゆる「**評判書**」が作られ、軍事の教材としての在り方がより明確です。

こうして、

武士的なものへの批判を含んでいた『平家物語』なども、戦い方や武士としての生き方を学ぶための「**軍記**」として理解されるようになるわけです。



熊谷直実銅像：熊谷駅前

「軍記物語」の誕生

5

ここまで前近代の話をしてきましたが、

「軍記物語」という概念が誕生するのは近代のことです。

近代国家となった日本が、

ヨーロッパの国民国家で作られている文学史を学んで、

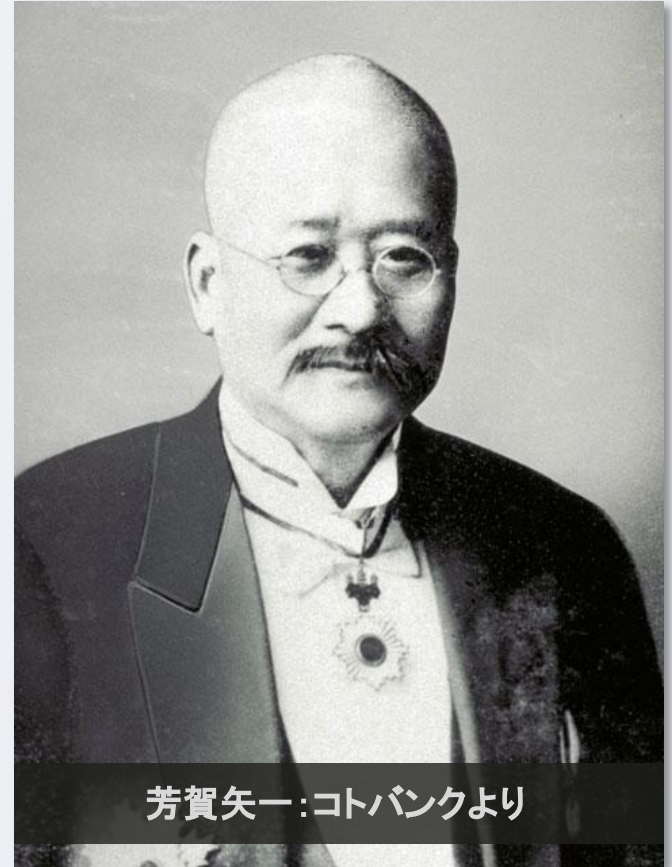
自国の文学史を作り始めたことによります。

「軍記物語」は、近世に盛んに用いられた**「軍記」**と、

古くから存在する**「物語」**を接合して作られた文学史用語であり、

最初にこの言葉を使ったのは、おそらく**芳賀矢一**であると見られます。

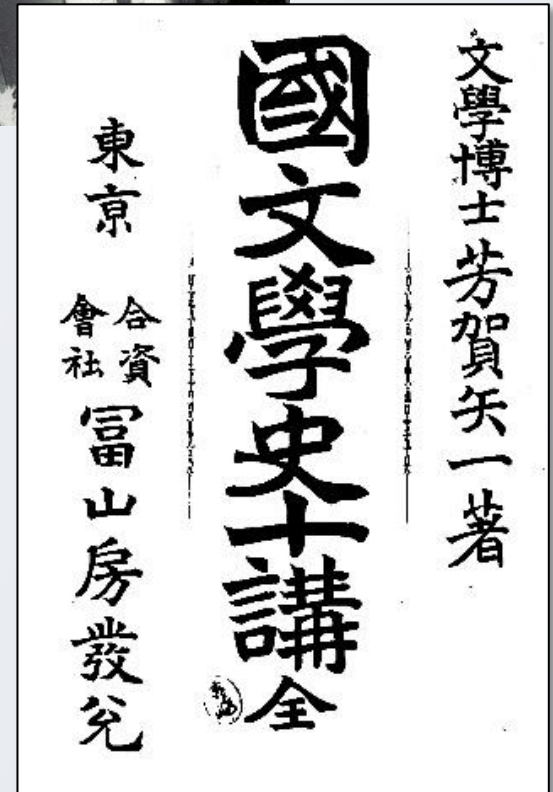
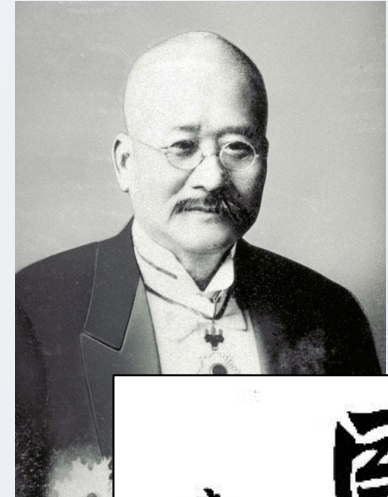
芳賀矢一はドイツ文献学を学び、日本独自の文学史を構想しました。



芳賀矢一：コトバンクより

芳賀矢一『国文学史十講』（富山房・明治三十二年1899）は、平安時代の『源氏物語』などから『栄花物語』や『大鏡』を經由し、『将門記』などと結びついて軍記物語ができたと述べています。これは既に現在の文学史の骨格を備えていると言ってよいでしょう。

その後、明治末期には『保元物語』『平治物語』『平家物語』『源平盛衰記』『太平記』をまとめて「**軍記物語**」または「**戦記物**」として記述する文学史教科書などが続々と作られ、「軍記物語」を中世の有力な作品群とする「日本文学史」が定着したようです。



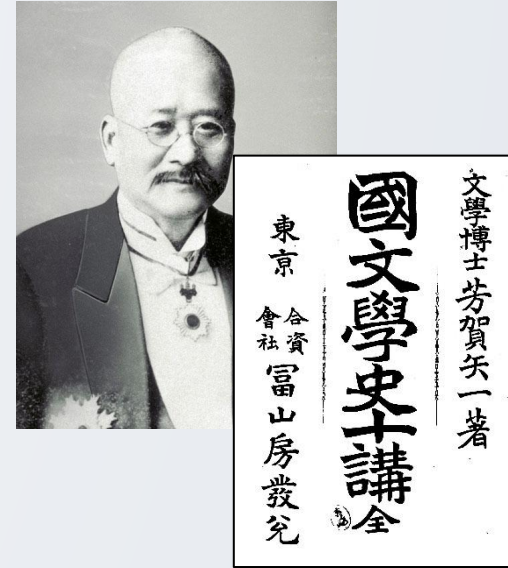
5. 「軍記物語」の誕生

33

芳賀矢一の『国文学史十講』について、もう一つ注目すべき点は、
『平家物語』に高い評価が与えられる一方、
『太平記』はそこまで重視されてはいないことです。

近世の「軍書」としての評価は『太平記』を随一としたのですが、
評価軸が「軍書」から「文学」に代わることにより、変化したと言って良いでしょう。

もともと、芳賀矢一自身は、別の文章では
『太平記』が「勤王の精神を含有すること」が多い点を高く評価しています。



「源平盛衰記と太平記と」『国文学』1890年11月。筑摩書房版『明治文学全集44』所収

それに対して、『平家物語』への高評価が鮮明なのが、藤岡作太郎です。

藤岡は、『平家物語』が「詩的分子に富める」ことなどを挙げて、
「軍書」的な色彩の濃い『太平記』よりも、『平家物語』をより高く評価しています。



藤岡作太郎

「金沢ふるさと偉人館」サイト
より

『国文学史講話』東京開成館(1908)

軍記物語は 武士の文学か

6

6. 軍記物語は武士の文学か

こうした点を見てくると、「**軍記物語**」は、
近世までの「軍記」「軍書」とは全く異なる観点から
生み出された概念であるように見えます。

しかし、近代の「軍記物語」理解は、
やはり前近代の「軍記」「軍書」理解を引きずっている面があります。
それは、**武士の文学としての理解**です。

たとえば、五十嵐力『**軍記物語研究**』（早稲田大学出版部・1931年）は、
「軍記物語」の名を冠した最初の研究書ですが、冒頭で

軍記とは武人本位、戦争本位の文学の義也

と述べています。

五十嵐は『新国文学史』（早稲田大学出版部・1912年）では、

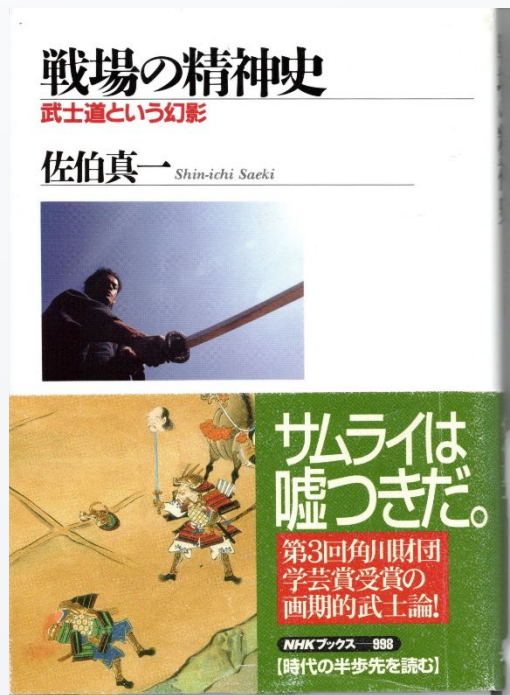
「軍記は武人の興隆に伴ふ内面苦悩の生活を書いたもの」とも述べています。

五十嵐力『軍記物語研究』目次

目次	六波羅行幸の圖（平治物語繪卷より）
序	清盛木像
目次	一八
前講	軍記物語研究
一	一三六
發端	音に聞こゆる爲朝
一	一
一	「軍記」とは武人本位、戦争本位の文學の義也。其の最も主なる代表作は『保元物語』、『平治物語』、『平家物語』、『源平盛衰記』及び『太平記』也。武家時代初期の巨人、鎮西八郎爲朝の面影。
一	『保元物語』の一章、「新院御所各門々固めの事附軍評定の事」全文。
一	爲朝獻策の圖（挿繪の第一）
目次	五

文学史的に見て、軍記物語の新しさが合戦描写などにあることは確かですが、
武士の精神を表現した文学と言ってしまうのは誤りないし言い過ぎです。

基本的には「作者」の表現として作品を論ずる国文学の枠組において、
武士が作ったわけではない軍記物語を、武士の精神の表現と規定してしまったあたりに、
前近代の「軍記」「軍書」的理解を無意識に受け継いでしまった面があるのではないかと、私は思います。



そして、より問題なのは、

「武士の精神」が、次第に「武士道精神」とされてゆくことです。

「武士道」については、ここで詳しく述べる余裕がないので、
佐伯真一『戦場の精神史』などをご参照いただきたいのですが、
武士の精神に源流を持ちつつも、近代に大きな虚構を伴って創造され、
20世紀前半に大流行したものです。



吉澤義則

「国を磨き、西洋近代を超える」サイトより

たとえば、吉澤義則の『日本文学全史巻五鎌倉文学史』（東京堂・1940年）は、『保元物語』『平治物語』について、

保元平治両物語に現はれた思想としては、
第一に**尊皇の精神、国家的意識**がある。

などと、「**尊皇の精神、国家的意識**」を強調します。

実際には、これらの物語に描かれている武士たちのほとんどは、
自分自身が所領を獲得するために戦っているのであって、「国家意識」などほとんど見られないのですが、
そうした**強引な解釈**によって日本の武士の「**忠君愛国**」を強調したわけです。

こうした忠君愛国の「武士道」論に基づいた軍記物語解釈は、
20世紀後半には急速に消えてゆきました。



むしゃこうじ・みのる
『平家物語と琵琶法師』表紙
淡路書房新社・1957年

そうした世相の変化の中、
戦後、20世紀後半の軍記物語研究で、最も勢いがあったのは、
唯物史観に立脚した、いわゆる「**歴史社会学派**」です。

「歴史社会学派」は、
「**社会の進歩を進める新しい勢力である武士階級が、
腐敗した貴族階級を打ち倒す物語**」
として、軍記物語、とりわけ『平家物語』を読もうとしました。

**琵琶法師が『平家物語』を語ったということも、
『平家物語』を民衆の文学と位置づける
有力な根拠になりました。**



琵琶法師(『七十一番職人歌合』東京国立博物館蔵)

琵琶法師の語る『平家物語』を、
いち早く**民衆の文学**と位置づけた書物です。

しかし、こうした論は、
軍記物語に「忠君愛国の武士道」を読もうとしていた戦前の研究の
正反対のように見えて、実は同根のものでもありました。

武士階級を「歴史を作り出す新興勢力」と位置づける読解は、
「天皇に忠義で勇敢な武士」を「明るく健康的な新興階級の武士」に変えただけで、
武士を美化して作品理解の基軸におくこと自体に変わりはなく、
「武士の文学」としての軍記物語という位置づけは温存されてしまいました。

そして、そうした議論が20世紀後半に次第に下火になった後、
軍記物語の研究は、諸本研究などの分野では飛躍的に進みましたが、
作品評価や「軍記物語とは何か」といった大きな視野からの議論は必ずしも進んでいません。

「軍記」「軍書」あるいは「武士の文学」としての理解を
自覚的に克服してゆくのは、今後の課題であると言えます。



おわりに

7

以上、私の近年の関心に基づいて大風呂敷を広げ、非常に駆け足で話して参りました。

詳しく説明すべきところを、

時間の関係で省略している点多々ありますので、

疑問や興味のある方は、

私の『軍記物語と合戦の心性』を

ご参照いただければ幸いです。



佐伯真一『軍記物語と合戦の心性』
文学通信・2021年

この場で最後にひとつ、申し上げておきたいことがあります。

『軍記物語と合戦の心性』にも書きましたが、
私が本日申し上げたような内容を考えるきっかけとなったのは、
北京日本学研究中心でのシンポジウム(2007年10月)において
韓国・高麗大学(当時)の崔官氏から、

〈軍記〉はむしろ、戦国から江戸の言葉ではないのか？

という趣旨のご質問をいただいたことでした。



崔官氏
東アジア文化交渉学会サイトより

新しい問題意識を育てるのに、
異文化、あるいは他分野の方との交流が有益であることは間違いありません。

人文科学研究所が、
そうした交流と創造の場として発展してゆくことを期待して、
拙い話を終えたいと思います。

ご清聴、誠にありがとうございました。